

幼児の情緒生活についての二、三の理論的結論（1952）

(1) 周辺の出来事

- 1950年 ハイマンが『逆転移について』を発表 - 逆転移の理解をめくり対立
- 1951年 ウィニコットが『移行対象と移行現象』を発表

(2) 解題

- ・1943年～1944年 英国精神分析学会（アンナ・フロイトとの大論争）で寄稿された論文を源泉とする
- ・幼児期の妄想 - 分裂的態勢、抑うつ態勢を系統的に公式化
- ・発達初期について描写した最後の論文
分裂と抑圧との関係を明確化 抑うつ態勢に現れる特殊な分裂
敵意に満ちた結合した両親という原始的な像 サディズムが最高潮を迎える期間について変更

(3) 論文の概要

【生後3ないし4か月（妄想的 分裂的態勢）】p77～92

- 「迫害不安の起源」p77～78 中段
- ・乳児は内外（出産体験など）原因 不安を体験
- ・死の本能により絶滅不安（fear of annihilation） 絶滅不安が迫害不安に変換

「対象関係の始まりと飽くなき貪欲という情緒」p78 中段～79 中段

- ・授乳体験、母親がそばにいる 母親との対象関係の始まり
- ・空腹感と緊張感
クラインは、均衡が崩れた際に生じる情緒を“飽くなき貪欲（greed）”
飽くなき貪欲・口唇期的な特徴 被害的な不安は貪欲を強め、最初期の授乳を妨げる

「良い・悪い乳房との体験」p79 中段～p80 中段

- ・欲求充足 欲求不満 リビドー衝動 - 破壊衝動 愛 - 憎しみ
欲求充足させてくれる“良い乳房” / 欲求不満を引き起こす“悪い乳房”
*原因 自我中での分裂過程（splitting processes） 対象関係の分裂過程 自我の統合が欠如
しかし、生後3～4か月の幼児でも、**良い対象と悪い対象は別個として存在していない**
母親の乳房は、良い側面も悪い側面も母親の身体が存在と混ざり合っている
- ・取り入れと投影による二重関係（部分対象）
外界に攻撃衝動を投影、攻撃衝動の原因は欲求不満をもたらす（悪い）乳房から
愛情を投影し、愛情は欲求を満たす乳房から
同時に取り入れられた対象（良い乳房・悪い乳房）は、超自我の核となっていく

「悪い乳房が帯びているサディスティックな内容について」p80 中段～81

- ・敵意に満ちた（悪い）乳房 幼児を口唇期的破壊衝動で攻撃
- ・尿道サディズムと肛門サディズム 悪い乳房に向けた破壊衝動により、恐怖の内容が決定
*被害的な不安は、**良い乳房との関係により中和**

授乳関係が重要「微笑、手、声、抱っこ」 満足感・愛情は、被害的な不安を緩和、良い対象への信頼感

「幼児にみられる情緒的特徴について」p82～84 中段

良い乳房 乳房の理想化...迫害者から保護してもらうために対象の力を強める 不安に対する防衛

幻覚（万能的支配など）によって欲求が満たされる

願望充足の幻覚で機能している機制と防衛

内外の対象に対する万能的な支配（omnipotent control） 対象の分裂（splitting）と感情の分裂 否認
欲求不満を起こす対象と悪い感情（分裂・排除された自我の部分）は消滅

「被害的な不安に持ちこたえる」p84 中段～p85 中段

- ・ 対象への感情...愛情（リビドー衝動）が破壊衝動を上回ると、過度の分裂は起きずに統合へ
抑うつ的な不安、罪悪感、修復（償い） 部分対象関係（母親の乳房）において、両価性を体験
- ・ **自我の統合力が高まると、リビドー衝動による攻撃衝動の緩和が可能 不安の軽減（正常な発達）**

「取り入れ同一視と投影同一視」p86～

- ・ 内的な良い乳房 愛す力・信頼する力 内在化 良い対象・状況の取り入れを促進
口唇期的欲望 乳房を粉々に破壊
- ・ 被害的な不安の推移<投影の問題> 口唇期・肛門期サディスティック
排泄物...**支配** 母親の身体に入り対象を自己の延長とする = 対象が自己を象徴

「リビドー衝動と攻撃衝動の統合によりもたらされるもの」p89～p90 中段

- ・ 対象に向けられる愛情と破壊衝動が統合 抑うつ的な不安と罪悪感
 - ・ 攻撃衝動に曝される内外の対象への不安 対象と同一化
傷を修復、攻撃衝動の抑制
- 自我の統合の進展 抑うつ的な不安？ 知覚の範囲も拡大 母親を一個の全体的な人間という**考え**が発達し、
抑うつ的な不安と罪悪感 一個の人間としての母親に集中 抑うつ的な態勢が表立つ

「妄想 - 分裂的態勢の特徴」p90 中段～

- ・ 取り入れと投影過程の相互交流により自我発達が決定
- ・ 極端な防衛機制は自我の発達に必要 安定感、良い対象で迫害的な不安を中和
- ・ 解体と統合 自我は統合され、被害的な不安を処理
- ・ 母親との身体部分に対する関係 一個の人間として母親との関係に移行

【幼児の抑うつ的な態勢】p93～105

「生後4～6か月にかけての知的・情緒的発達の変化」p93～

- ・ 幼児の外的世界（人・物）に対する関係は成長・分化
様々な自我機能も発達し、**性的編成（sexual organization）が進展**
口唇期の衝動と欲望が支配的
- ・ 尿道期、肛門期、性器期的のリビドーと攻撃衝動 不安状況
- ・ 幻想の広がり、防衛機制は質的变化
- ・ 対象関係の変化（総合と統合の過程）
- ・ 母親の乳房（部分対象）から一個の人間としての母親（完全な対象）との関係へ

「統合と総合によって」p94～96

- ・内在化された対象と外的対象の相異なる側面 自我の統合も進展、愛と憎しみとの葛藤?
- ・完全な対象 (complete object) に対し、両価性の体験
- ・妄想 - 分裂態勢での攻撃衝動は弱まる 良い・悪い対象との隔たり消失
- ・愛対象を失うことは飽くなき貪欲を強化 過度な本能欲動の抑制 摂食、他者との関係 (性愛的な関係)
- ・被害的な不安を防ぐために用いられていた防衛 (否認・理想化・分裂) 抑うつ不安を防ぐ (ex.躁的防衛)
- ・不安状況での否認 対象へ向けている愛情も否認 良い乳房との関係からも目を背ける
妄想 - 分裂的態勢へ退行

- ・抑うつの態勢における分裂...完全な対象 (生きた対象)(危機にさらされている対象)に
- ・自我の発達 不安に対し適切な防衛
外的世界の理解を深まる 理想化された像と恐ろしい像に歪んだ両親像 現実的なものへ
- ・安心できる外的現実を取り入れ、内的世界は改善 外的世界が望ましく
損なわれない対象を確立 超自我の重要な組織化 自我は発展的な形で超自我を同化

「損なわれた対象の修復」p96～p98

- ・修復は生の本能が起源 抑うつを軽減する重要な手段 罪悪感と結びつき損なわれた対象を保護
抑うつの態勢において、初期の修復傾向は万能感を伴う
ex)「お母さんはいない、苦しんでいる。いや、そんなことは起こらない、自分はお母さんを生き返らせることができるから」と考えられる
- ・対象を修復する力に自信 万能感は薄らぐ
- ・現実の適応性 内的・外的世界の安定、両価性と攻撃性の軽減

「抑うつの態勢と喪・メランコリーとの関係」p99～101

- ・抑うつの態勢
[基礎概念]口唇リビドー、食人衝動、一次的取り入れ(フロイトとアブラハム)
 - ・抑うつの態勢と喪・メランコリーとの密接な関係
<<喪とその躁うつ状態との関係>>
正常な喪: 喪の作業を通して、失われた愛対象を内的に回復・定着させる
病的な喪(悲哀): 愛対象に対する破壊や攻撃性の投影 愛対象を傷つけ、破壊したいという幻想を生み
罪悪感や被害的な不安感が賦活
 - ・生後1年で抑うつの態勢で課題を通り抜けたか、対象を内的に定着できたか 躁うつ

「抑うつの態勢と早期エディプス・コンプレックス」p101中段～p103

- 生後1年半 完全な対象との関係? 部分対象関係が重要な役割
性器期的な欲求? 口唇期リビドー 口唇期的欲求...母親の乳房から父親のペニスへ移行
- ・良い乳房を母親が持っている 自分の望むペニスを母親が持っている
- ・性器期的欲求+口唇期的欲求 父親ペニスの内在化(良い・悪い側面)

「羨望と嫉妬」(p103～104)

- ・羨望...二者関係 良い乳房を奪い取り、悪い排泄物や悪い部分の乳房を破壊したい

- ・嫉妬...三者関係 母親 (or 父親) は父親のペニス (母親の乳房) を奪い楽しんでいる
結合した両親像 (combined parent figures) “ペニスを持った女性”
両親との現実的な関係を発展させることで、両親を独立した個人と感じる

「母親を失う不安と代理対象としての父親」(p104 ~)

- ・母親を失う (抑うつ的な不安) 代理対処を求める (完全な人間としての父親)
母親へ向けていたリビドーと抑うつ的な不安 父親へ
- ・正常な発達...5歳までに被害的不安と抑うつ的な不安は緩和される 1歳半の後半が重要

その後の発達と不安の緩和 (p106 ~ 114)

「発達の過程と不安」(p106 ~ 110)

- ・精神病的な特質の不安 (迫害不安、抑うつ的な不安)
不安の変遷は発達の変遷と相互関係 粗大・微細運動、遊ぶ、言語発達、知的発達、清潔習慣、昇華の発達、対象関係の範囲の拡大、リビドー編成の進歩/不安とその諸防衛と密接
- ・『早期不安に照らしてみたエディプス状況』
両親に対する被害的な恐怖 早期恐怖症 (early phobia)
- ・両親への性器期的欲求 早期エディプス・コンプレックス
破壊衝動による不安が著しいと前性器期に固着

口愛的な昇華...欲しい食物・愛情を受け入れる 母親に食べさせ、母親をもとの姿に戻したい

- ・性器期優位性 (genital primacy) ・象徴形成機能
- ・抑うつ的な不安...欲望や情緒を新たな対象や関心に向ける投影、そらし、分散
修復したい、止むにやまれぬ気持ち (背後にある罪悪) 生涯にわたる
欲望や不安が分散 最初の対象に愛情を保持していただけること 昇華の達成に必要な
最初の対象に悲しみ・憎しみが支配的だと、昇華・代理対象を危険に
抑うつ的な態勢での失敗、愛する対象に加えられた破壊 どうにもならないという絶望感

「防衛機制の変遷」(p110 ~ p114)

- ・早期恐怖症 被害的な不安や抑うつ...摂食困難、暗闇恐怖、対象関係一般への困難
- ・内的迫害者への恐怖 心気的な不安
- ・生後2歳以降 外的現実を通して内的な危険を吟味 身体機能に対して強まった支配力を用いる
強迫機制 ex) 清潔習慣 危険な大便 (破壊性) に対する不安 悪い内的対象 セルフ・コントロール
- ・母親や保母の排便への是認 良い物へ変換
- ・防衛機制に “抑圧”
- ・超自我の構造変化

結論 (p115 ~ p116)

「抑うつ的な態勢を克服への歩み」

- ・最初期は被害的な不安が優勢 リビドー編成が進展 不安の緩和
- ・外的世界と内的世界 - 取り入れと投影の過程の変化 自我は超自我を同化する能力を獲得

【考察と疑問点】

- ・1950年に共同研究者でありアナリザントでもあったハイマンと逆転移の理解をめぐって対立し、1951年はウィニコットに対しても母子関係（母子ユニット）の理解をめぐり対立した。妄想 分裂的態勢と抑うつ的態勢を系統立てた公式を世に出すにあたって、共同研究者や身内にクライン派から逸脱する思考をするものは許せなかったのかもしれない。
- ・妄想 分裂態勢において、被害的不安は良い乳房との関係によって中和されるというのは、生の本能が死の本能を陵駕しなくてはならないということである。抑うつ的態勢においても生の本能と死の本能における自我心理学派のP.タイソン（2005）らは、クラインが防衛を幅広く記述しているのに、構造論的に防衛機制を成功させることより“良い”体験が“悪い”体験より優勢になることの方を内的調和の維持には重要とみていると述べている。分裂を始めとした抑圧などの防衛機制の記述を見ると、防衛機制について述べてはいるが重きをおいている場所は別にあることが見て取れた。
- ・「償い」は、無意識的幻想の中で破壊衝動によって対象を傷つけてしまい、抑うつ的態勢において対象を修復しようという感情で愛情に基づいているとされる。「羨望」に対して、「償い」という心の動きはあるのか。